

鴨川

藤田 和樹

(2019 年度入学 鈴木ゼミ 3 期生)

私は大学生になり兵庫県川西市から京都市に引っ越してきたことで、京都市に多くの良い場所があることを肌で感じた。寺社、仏閣、豊富な自然、都市らしい場所など挙げればきりが無い。最も素晴らしいと感じたのは鴨川である。私は上賀茂に住んでいて、鴨川を訪れる機会が多いので、その良さや地域に住む人々がどのように利用しているのかを知ることができた。

まず、鴨川は散歩スポットとして非常に優れている。私自身散歩が好きで、上賀茂から京都駅までの往復 20 km を鴨川に沿って歩くことが多い。鴨川は散歩スポットとして数多くの魅力を感じる。

1 つ目は 10km 以上の距離をノンストップで歩けることだ。河原が整備されており、信号がなく、車道に上がらず、散歩を楽しむことができる。



2 つ目は、歩く際の肉体的、精神的負担が少ないことだ。水辺は道路よりも涼しさを感じやすく、川岸が広いため、安全に散歩することができる。また河原はよく管理されていて、ベンチに座ることができる。さらに、大きなアップダウンはなく、車道に出る階段も整備されている。これらのことから、鴨川は散歩ルートとして優れており、多くの人々が散歩やランニング、サイクリングに利用している。

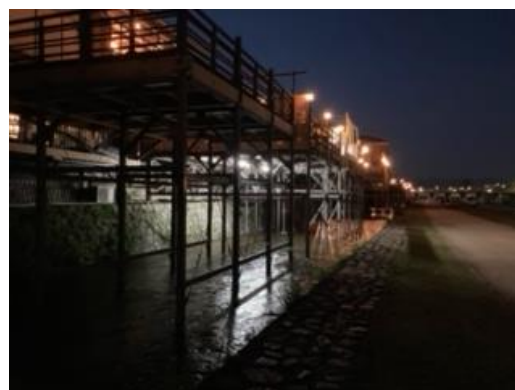
また鴨川は散歩だけでなく、若者たちのたまり場としても利用されている。特に三条から五条にかけてはカップルや大学生でにぎわっている。ここで着目すべきは、川岸に座っている人たちである。この人たちからは鴨川等間隔の法則という人間の本能的な距離の取り方というものを観察できる。これは座っている人の中央に新たな人が座るという



法則である。等間隔に座っている場面を見て、後から来た人もその流れに従う。距離が狭まりすぎるとその間には座らない。これは誰かが示し合わせたわけでも、どこかに印があるわけでもなく、自然と等間隔に座るという現象である。独自の観察ではそのように見られたが、一方で左右間には統計的優位差がない調査結果もある。等間隔は部分的なものであり、全体からは必ずしも等間隔とはいえないものだ。

この法則は新型コロナウイルス感染症とは関係していないと考えている。私が観察した結果、思ったよりもその間隔が広がったとは感じず、一昨年と比較して大きな変化を感じることはできなかった。たしかに、鴨川を訪れる人は減少しているのだが、川岸に関しては大きな変化が見られない。

そして鴨川の最も大きな特徴は鴨川納涼床である。三条から五条にある飲食店の外の席で川を間近に感じ、食事を楽しむことができる。これは二階ほどの高さにある床席で、川辺にいる人たちとの距離をお互いに感じさせないように工夫されている。この床に一階は存在せず、ただ骨組みがあるのみである。その下にはみそそぎ川が流れる。この納涼床は清涼感に加え、視界では鴨川を楽しむことができる。



また多くの店が並んでいることで、夜には川岸にいる人々の照明代わりにもなっている。それが雰囲気合った趣のある電灯であることも、鴨川の良さを引き立てている。

鴨川は、長距離の散歩が出来ることに加え、川岸では多くの人が談笑できる。また四条周辺には飲食店も多く、種類也多岐にわたる。加えて交通の利便性も高い。これらが、鴨川が多くの人に利用されている要因であり、愛されている理由と考える。

しかしこの風景もコロナ禍で外出が減り、見られなくなっていった。特に橋付近や河原で遊ぶ人が減り、閑散としている。コロナの終息により鴨川に活気が戻ることは、観光や食文化、自然のすばらしさの再発見にもつながる。このため、一日も早いコロナの終息を願っている。

参考文献

[kamogawa_honda1995-1999.pdf \(team1mile.com\)](https://www.team1mile.com/kamogawa_honda1995-1999.pdf)